

■ 学校の共通目標

授業作り	重点	問題解決型学習の展開、児童による課題づくり、児童相互の学び合いを中心とした主体的・対話的で深い学びをつくる指導方法の在り方を探る。	中間評価	高学年の各学力テストでは技能、理解面とも良好な結果であった。問題解決型学習を通して児童の主体性や児童相互の関わり合う力を伸ばしていくことが必要である。	最終評価
		UD に配慮し、全ての児童が主体的・対話的で深い学びを行うことができる学習基盤をつくる。学習・生活ルールを統一し、全ての児童が安心して学習に臨めるようにする。		「戸スタ標準」を基に、落ち着いて学習するための基盤を作ることができた。今後は話し方・聞き方のルールを一層徹底していく。特にどの児童もその場にあった大きさの声が出せるよう、全校的に様々な場面を捉えて具体的に指導していく。	

■ 学年の取組内容

教科	学習状況の分析 (10月)	課題 (10月)	改善のための取組 (10月)	最終評価 (2月)	
1	国語 <ul style="list-style-type: none"> 平仮名は、ほとんどの児童が読むことができるようになったが、音読に差がある。 文章を書くことに慣れ、書くスピードも速くなってきた。 漢字の学習が始まり、楽しんで学習しているが習得状況に差がある。 話したいことをみんなの前で話せるようになってきたが、聞くことに課題のある児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 音読は、すらすら読める児童がいる一方、拾い読みをする児童もいる。 書きたいことを、文章に書き表せるようになってきたが、「は」「を」「へ」の使い方を始めとして、拗音、長音など、誤字脱字が多い。 文中での漢字の使い方が間違っていたり、漢字を使わないでひらがなで書いてしまったりする。書ける漢字も、文字の形が、きちんととれない児童がいる。 話している人の方を向いて聞いたり、話を最後まで聞いたりすることができない。 	<ul style="list-style-type: none"> 音読は、家庭学習だけでなく、各教科で声に出して読む練習をする。 各教科の振り返りなど、文章を書く活動をなるべく毎時間行うようにする。また、学校行事等の体験を文章に表し、それを互いに読み合うことを通して、適切な文章の表し方を身に付けられるようにする。MIM-PMを毎月実施し、児童の習得状況を把握し、必要に応じて個別に指導をする。 家庭での漢字学習で文章を使って書く練習を必ず取り入れる。また、書写の時間を通して、「とめ」「おれ」「はね」「はらい」に気を付けて書けるよう指導する。 聞くときに気を付けることを具体的に示し、しっかりと聞く態度を指導する。 		
	算数 <ul style="list-style-type: none"> 10以内の加法や減法、繰り上がりのある加法については、大体の児童が理解できている。 既習の学習を生かして計算の方法を考えたり、説明したりすることができるようになってきた児童もいるが、課題のある児童もいる。 単純な計算はできるが、問題文を読み取り、式にする力に差がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 計算は、ほとんどの児童ができるが、速さに差がある。 計算の方法などを、操作や言葉などを用いて説明することを苦手としている児童がまだ多い。 文章を読み取り、聞かれていることを式にできる力に差がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習も含めて、ドリル練習を行う。 考え方の説明の仕方を具体的に示す。また、ペア学習などで自分の考え方を、伝える経験を積ませる。半具体物やICT機器等を利用し、児童が自分の考えを発表する機会を設ける。 アンダーラインを引かせるなどして何を聞かれているのかを明確にするようにする。 体験活動を算数でも十分に行う。 		
教科	学習状況の分析 (4月)	課題 (4月)	改善のための取組 (4月)	中間評価・追加する取組 (10月)	最終評価 (2月)
2	国語 <ul style="list-style-type: none"> 漢字学習に積極的に取り組んでいる。細部への注意はできておらず、細かい間違いが多い。また、文章の中で習った漢字を使わない児童が多い。 手紙や日記など、伝えて書くことが好きである。書く際に、特定の児童に拗音や拗長音などの間違いがある。 聞いて理解することが苦手な傾向がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 既習漢字や新出漢字の学習で、辺やつくり方に気を付けて書くこと。 既習漢字や新出漢字を使って文を書くこと。 特殊音節に気を付けて書くこと。 聞いて理解すること。 	<ul style="list-style-type: none"> 漢字学習の際、気を付けることを明確に示す。また、漢字の由来などを話しながら、覚えやすくする。 正確で素早い語の読み能力を把握するアセスメント(MIM-PM)の結果を参考にしながら、特殊音節の学習の定着度を見極め、必要に応じて個別に指導する。 授業や帰りの会などで、スピーチの時間を設け、友だちが話していることを興味をもって聞き、質問するといったやりとりを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 漢字学習は意欲的に取り組んでいる児童が多い。作文などでも既習漢字を使うよう指導を続ける。 国語や日々の活動からスピーチの型が定着しつつある。ペアでの話し合いは上手になってきたため、集団の前で発表する、質問をする、答えるという機会を増やしていく。 	
	算数 <ul style="list-style-type: none"> 単純な計算問題はよくできている。 国語の読む力とも通ずるが、文章問題を読んで理解できていないことも多く、イラストから想像して問題を解くため、正しく立式ができない児童がいる。 表とグラフといった、見て比べる学習は得意である。 	<ul style="list-style-type: none"> 文章問題で聞かれていることを明確にしながらか立式すること。 	<ul style="list-style-type: none"> 単元別の文章問題ではなく、既習学習が混ざった問題に取り組ませる。そうすることで、問われていることは何かを読んで判断できるようにする。また、立式するときに必要な言葉を確認する。 どうして、そういう式になったのかを説明し合う機会を多く設ける。 「東京ベーシック・ドリル」やドリルなどを活用しながら、既習単元についての理解を確実にする。苦手な単元については、復習の時間を設ける。 長さでは、生活科の観察場面など、算数科以外の時間にも測量する体験を積ませる。 	<ul style="list-style-type: none"> 単純な計算は正答できるが、文章問題については差が出ている。今後は意図的に児童により身近な日常生活に関わる事例を取り上げ、問題の意味を把握させることで正しい立式ができるようにしていく。 ドリルなどを活用しながら学習を進めることができた。学習後しばらく経った後に振り返ることが必要だと感じる。 かさや長さといった単位の学習が難しかったので、日常生活でも意識できるよう声をかけていく。 	
3	国語 <ul style="list-style-type: none"> 前年度の学力調査では、すべての観点の正答率が全国平均を上回り、特に「話す・聞く能力」「読む能力」の正答率は全国を大きく上回った。一方で、物語の内容について、登場人物の行動や心情を読み取ることが苦手な児童が見受けられた。 家庭学習に意欲的に取り組む児童が多い。漢字の書きと読みでも力がついてきている児童とそうでない児童の差が大きい。文章から根拠を見付けながら読み取り自分の考えを表現したりすることについては、苦手とする児童も多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 既習漢字や新出漢字を字形や送り仮名、特別な読み方に気をつけながら正しく読み書きをすること。 場面の登場人物の行動や心情を読み取る力をつけること。 自分の考えを持ち、言葉の使い方に気をつけながら、相手に分かりやすい文章を書くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 国語の授業だけでなく、授業の始めや朝の会、帰りの会などで、スピーチの時間を設ける。クラスでテーマを決めて、5~6分のスピーチを行い、その話題について話し合ったり、質問し合ったりする機会を増やす。 新出漢字を学ぶ際に、声に出して何度も唱えて覚えることができるようにする。定期的に漢字の習熟を確認する小テストを行う。誤答について練習をして、再度テストを行い、習熟を図る。 文学的な文章を読む際には、登場人物の様子を思い浮かべられるように、場面ごとの読み取りの前に、まずは挿絵を基に作品全体について理解できるようにし、情景描写や登場人物の心情表現に着目させて理解を深められるようにする。 書く目的をはっきりさせ、誰が読むのかという相手意識をもつように指導する。そのうえで、身近な出来事について、手軽に文章を書けるようにさせる。授業の終末に振り返りを書く際、思ったことや感じたことを簡単に会話する中で、書くためのヒントに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> テーマに沿ったスピーチを継続的に行い、自分の考えや意見を話したり、友達の発表に対する感想を伝え合ったりしている。 漢字小テストを単元ごとに行ったり、eラーニングの問題やベーシックドリルを活用したりしながら、習熟を図っている。今後は、定着を確認するシートを活用し、児童の定着度を視覚化し、目標をもって学習を深めることができるようにする。 挿絵や題名などから、物語の内容を考えさせ、その後情景描写や登場人物の心情表現に触れ、理解を深めることができるようにしている。 文にまとめる際には、型を提示し、相手意識をもって書くことができるようにしている。 	

	算数	<p>調前年度の学力調査では、全国平均を上回っている。観点別にみると、すべての観点の正答率が全国を上回り、特に「数学的な考え方」「数量や図形についての技能」の正答率が全国を大きく上回った。一方で、「量と測定」の領域については知識・理解が十分身に付いておらず、課題が残った。</p> <p>学算数の授業自体への取り組みの姿勢から、学習意欲が高いことが分かる。一方でかけ算九九や、時刻や量など基本的な内容に対する苦手意識をもつ児童が多く、基礎・基本の習熟が必要である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 量と測定の領域、特に長さや嵩に関する領域の知識理解を身に付けること。 かけ算九九の基礎・基本を習熟させること。 	<ul style="list-style-type: none"> ものさしについては、数直線との関連を図ったり、大きい目盛り（cm）、小さい目盛り（mm）などの区別を付けたりして、その仕組みを理解させる。日頃から目盛りを読み取る機会を作る。また、1Lの量がどれくらいなのかという量感を育てるため、実際にペットボトルなどを用いて水を入れたり、測り取ったりする活動を取り入れる。 わり算やかけ算の筆算など、かけ算を扱う単元での九九の反復練習を授業中や宿題などに行い、習慣化を図る。 苦手意識のある単元では、既習事項の復習の時間を設けたり、ドリル学習を行ったりして基礎基本の習熟を図る。 各単元末や学期末には、「東京ベーシック・ドリル」や「フォローアップシート」を活用し、個人の達成カードで既習内容に関する自己の到達度や苦手とする領域を児童自身が認識して取り組めるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 他教科の学習でも、数直線図やめもりの問題にふれ、めもりの数や一つ分が表す量を考える機会を意図的に設定している。今後は、具体物を実際に操作し、量感を育てていきたい。 九九の確認問題を定期的に行うことができたが、定着が不十分な児童に対しては、今後も継続していきたい。 単元ごとにミニテストを行ったり、「東京ベーシック・ドリル」等を活用したりして、習熟を図ることができた。今後も、既習内容の到達度を把握させ、児童が自分の課題意識をもって学習に取り組むことができるようにする。
4	国語	<p>調昨年度の学力テストでは「書くこと」の領域、特に漢字と作文で大きく課題が見られた。また学力分布図は広い分散傾向となっており、児童間の力の差が大きくあることが分かる。</p> <p>学書く作業そのものに抵抗感がある児童がとても多い。また他の授業においてもノートを書くときに非常に時間がかかることがある。書くことに慣れていないことがうかがえる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 前年度までの漢字、および語彙の習得を確かなものにする。 基本的な文章モデルを習得させること。 書くことへの抵抗感をなくすこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 「東京ベーシック・ドリル」や「フォローアップシート」を中心に漢字や語彙の習得を図る。書くことが苦手な児童もいるので、ただノートに練習するだけではなくフラッシュカードやICTを使用して様々な支援ができるようにして理解を促す。 モデル文から基本的な書き方の構造を学ぶ。モデル文を使って自分の考えを書くことを通して説明文や記録文など基本的な文の構成を習得する。 各教科において書くことを意図的に行い、日常の中で文章を書くことに慣れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 国語の授業や漢字の練習、読書の時間において多くの語彙にふれることで、知っている言葉、使える言葉を増やしてきた。「フォローアップシート」は十分に使えていないので使う機会を増やし、語彙力の向上を図る。 教科書の文章をモデルとしながら、分かりやすい文章表現を習得してきた。習熟が十分な児童は定型文から離れ、自分の伝えたいことをより表すことができる文章作りを行っていく。 お礼の文や感想文など国語以外の授業でも文を書く機会をもつことで、基本的な文型について慣れてきた。さらに新しく習得した語彙や漢字も使えるように促していく。
	算数	<p>調昨年度の学力テストでは「たし算・ひき算」の領域で大きく課題となった。また国語と同様に学力分布図から分散傾向にあることが示され、児童間の力の差が大きくあることが分かった。</p> <p>学学習熟度が十分でないグループでは基本的な四則計算でつまづいている児童が多い。習熟度が高いグループでは自分の考えを言葉や図で表したり、それらを他の児童に伝えたりすることを苦手とする児童が多く、数学的な考え方を深めていくことが難しい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> たし算、ひき算などの基本的な計算力を身に付けさせること。 前年度までの各領域の技能や知識、理解の習得を確かなものにする。 数学的な考えを表現し伝え合うこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 「東京ベーシック・ドリル」や「フォローアップシート」を中心に基本的な計算力の習熟を図る。前学年のものから始め、年度末達成度の向上を目指す。 習熟が十分でないクラスにおいては前年度までの復習を学習の始めに行い、つまづきを少なくしてから新しい学習に取り組めるようにする。 高い習熟度のクラスでは考えを図や言葉で表す機会を多く設ける。計算や作図の技能だけではなく、考え方について交流ができるように時間を計画的にとり、児童同士の交流の中で考えを深められるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「東京ベーシック・ドリル」に取り組む時間が十分に確保できなかった。定期的に行っていくことが必要である。 習熟が十分でないクラスでは基本的な前年度までの学習や基本的な計算に取り組むことでつまづきを少なくし、児童の取り組む意欲や習熟度の向上を図ることができた。 習熟度の高いクラスでは考え方について話し合ったり、まとめたりすることや難易度の高い問題に全体で取り組むことで児童同士の交流の中で考えを深めることができた。
5	国語	<p>調昨年度の新宿区学力定着度調査の結果では、基礎問題、活用問題ともに新宿区の平均を上回り、学力の定着が見られたが、「作文」については、新宿区の平均と同程度にとどまった。</p> <p>学家庭学習等での漢字の習熟のための練習は丁寧に行える児童が多い。授業中の発言や挙手も活発で意欲的ではあるが、感想や考えを書く作業に抵抗感を示す児童が少なくない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 既習の漢字を用いて正しく文章を書くことと、語彙の習得を確かなものにする。 書くことへの抵抗感をなくすこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習や言語単元の導入時などで、漢字ドリルや「東京ベーシック・ドリル」、「フォローアップシート」を活用し、既習の漢字や語彙、文法についての復習と習熟を図る。特に漢字ドリルについては、繰り返し習熟が図れるように漢字練習ノートを併用し、週に4日程度は家庭学習の課題とする。 授業後の振り返りの時間を活用して、自分の感想や考えを文章化する活動を多く取り入れる。さらに、それらの中で自分の書いた文章を見直し、推敲するように習慣づけていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 「平成31年度児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果では、各観点において東京都の平均を上回り、学力の定着が概ね見られる。 調べたことを決められた時間内で発表する常時活動を取り入れ、話す力、聞く力ともに高める。 要点、段落指導用教材を活用し、説明的文章の読解力向上に向けて取り組む。
	算数	<p>調昨年度の新宿区学力定着度調査の結果では、基礎問題、活用問題ともに新宿区の平均を上回り、学力の定着が見られた。問題の内容別正答率を見ると、特に「計算のきまり」「角の大きさ」「数量関係」で良好な様子が見られた。一方で、「垂直・平行と四角形」「図形」「面積」では、新宿区の平均程度の正答率にとどまった。</p> <p>学学習熟度が十分ではないグループでは、三角定規や分度器などを使用して、正確に作図することが難しい様子の児童も見られる。また、技能的な習熟が定着しているグループにおいても、解法を説明したり、他の解法を見つけたりすることには課題が見られる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> これまでに学習した技能を確実に習熟させること。 解法を自分の言葉で説明すること。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習や言語単元の導入時などで、計算ドリルや「東京ベーシック・ドリル」、「フォローアップシート」を活用して復習に取り組むとともに、再度、正しい手順で作図したり、測定したりすることについて指導をしていく。特に計算ドリルについては、繰り返し習熟が図れるように計算練習ノートを併用し、週に4日程度は家庭学習の課題とする。 自力解決の時間を十分に確保し、解法を交流する際は、ペアや全体など様々な形の交流を取り入れ、解法の説明の仕方を互いに学び合えるようにする。また、考えを共有する場面等でICT環境の有効な活用を図っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 「平成31年度児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果では、各観点ともに東京都の平均を上回り、成果が見られる。 コースの実態に応じた授業展開を工夫し、発展的な問題への挑戦、ICTの活用、既習事項の振り返りミニテスト等を取り入れる。
6	国語	<p>調前年度実施の学力調査の結果では、基礎問題、活用問題ともに新宿区の平均を上回り、学力の定着が見られた。特に「漢字を書く」「物語の内容を読み取る」ことに優れていた。</p> <p>学漢字の読み書きの家庭学習には意欲的に取り組む児童が多い。文章から根拠を見付けながら読んだり自分の考えを表現したりすることについては、苦手とする児童も多い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 言葉や文章を大切にしながら書かれてあることを正しく読み取る。 要旨をまとめること。 構成に沿って自分の考えを表現豊かに書くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 長文教材の前に組み込まれている短文教材を使って、長文教材に入る前に、要点を正しく捉えたり、構成を捉えたりする学習を丁寧に行う。 要点を捉える、要約をする、要旨をまとめるといった段階的指導を行うとともに、要旨をまとめる際の手だてを示す。 表現の種類を提示したり、互いに学び合う中で新たな表現を獲得したりすることを通して、表現豊かに書く力を身に付けられるようにする。 	<p>調平成31年度全国学力・学習状況調査の結果では、国語科の平均正答率は全国、都よりも大きく上回り、学力の定着が見られる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 調査結果からは、「報告文を書く」ことに課題が見られたため、目的に応じて自分の考えを適切にまとめる学習を、国語科のみならず他教科の様々な学習活動のまとめに取り入れるようにする。

	算数	<p>調前年度実施の学力調査の結果では、基礎問題、活用問題ともに新宿区の平均を上回り、学力の定着が見られたが、「単分量あたりの大きさ」では新宿区の平均程度にとどまり、課題が見られた。</p> <p>学全学年までの計算は定着している児童が多いが、文章問題を数直線に整理したり、自分の言葉で解法を説明したりすることに課題が見られる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • これまでに学習した計算問題の確実な習熟を図ること。 • 題意を捉え、適切に数直線に整理すること。 • 解法を自分の言葉で説明すること。 	<ul style="list-style-type: none"> • 「東京ベーシック・ドリル」や「フォローアップシート」をはじめとした基礎、基本の定着を図る取組みを継続して実施する。 • 数直線のかき方を再度指導し、様々なパターンの問題に対し数直線に整理して立式する課題に取り組めるようにする。 • 自力解決の時間を十分に確保し、解法を交流する際は、ペアや全体など様々な形の交流を取り入れ、解法の説明の仕方を互いに学び合えるようにする。 	<p>調平成 31 年度全国学力・学習状況調査の結果では、算数科平均正答率は全国、都よりも大きく上回り、学力の定着が見られる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 調査結果からは、「図形」「量と測定」の領域に課題が見られたため、習熟度別学習でコースに応じた学習展開を工夫するとともに、確認ショートテストやオリンピックドリルも積極的に活用し、定着を図る。 	
	音楽	<p>学低学年では、互いの声や音をよく聴き、合わせようとする態度の土台ができてきている。友達と協同し学習する楽しさも感じ始めたところである。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 中学年では、表現する楽しさや、他の表現のよさを感じ取る態度が身に付いている。思いや意図を表現するための技能は個人差がある。 • 高学年では、新しい知識や経験に対して主体的に学ぶ態度が身に付いている。一人一人がもっている思いや意図を生き生き表現するための創意工夫や技能は課題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> • 互いの表現を大切にし合える認め合いの関わり。 • 思いや意図を表現するための工夫や技能を向上させること。 • 器楽実技や読譜能力を高めること。 • 音楽づくりの素地を養うこと。 • 楽曲のよさを捉えて最後まで大切に聴くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> • どの友達とも交流し、協同して学び合える関わり合いを大切にグループ学習を多く取り入れる。 • 試行錯誤し思いや意図を表現するための学習提示や教材の工夫をする。 • 器楽活動での個別指導の充実を図る。 • 表現と鑑賞を関連させた題材構成を行う。 • 系統立てた鑑賞や音楽づくりの学習指導を取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 互いの表現を大切に認め合える心情や雰囲気のある素地はできてきた。しかし、最後まで音を大切に聴くことや楽器の取り扱いが雑なことが大きな課題として残っている。日常的に毎授業で言葉かけをし定着を図る。 • 器楽実技や読譜能力の定着も見られてきた。その身に付いた力を音楽づくりにも生かしていく。 	
	図工	<p>学低学年は、実際に見たり、材料に触ったりすることなど、体の感覚を働かせた表現を得意とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 中学年は、材料や道具などへの興味・関心が、表現活動への意欲となって発想を広げる傾向がある。 • 高学年は、今まで学んできたことを活用して自分なりの表現をする力が育ち始めている。 	<ul style="list-style-type: none"> • 個に応じた指導の工夫をし、課題をもつ児童には、休み時間等を活用して個別指導ができる時間の設定すること。 • 自分以外の人の感じ方や表現の違いに気付けるようにするための話の聞き方についての学習ルールの定着を図ること。 • 発想したことを表現につなげる見通しを人や物と関わりながら、見つけ出せるような指導の工夫をすること。 • イメージを膨らませ、自分の表現を具現化する過程で、考えを明らかにし計画的に進められるような授業づくりを行うこと。 	<ul style="list-style-type: none"> • 課題がある児童に対して昼休みを活用し、個別指導ができる時間を設ける。 • 図工室のルールを明確にするとともに、鑑賞の時間を使って、児童が互いに話をしたり聞いたりする活動を充実する。 • 試しながら決めていく活動を繰り返す。その中で人と話したり、工夫を見付け出したりする機会を増やし、活動の見通しがもてるようにしていく。 • ワークシートを活用して自分の考えを明らかにし、必要なものや手順を考えられるようにしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> • 個に応じた指導の工夫をし、課題のある児童には休み時間等を活用して、個別指導ができる時間を設けることができた。 • 友人の話を聞いて、自分以外の人の、感じ方や表現の違いに気付けるよう、学習のルールを定着することができた。さらにルールの定着を図る。 • 発想したことを表現につなげる見通しをもてるようにするため、人や物と関わりながら、見付け出せる指導の工夫をすることができた。より鑑賞の時間を多くとるようにする。 • 自分の表現を具現化する過程で、考えを明らかにし、計画的に進められるように、学習過程を工夫することができた。 	
特支						

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況

学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト等から見える学習の状況

※分量は 2 ページ以上となってもよい。